

— 第4編 — かつてドバイは

ドバイ*1は小さいながらも、海の交易の拠点として栄えた美しい港町であった。今日の蜃気楼のような開発が本格化する前夜のことだ。パリのG・キャンディリス事務所に新しい仕事が舞い込んだ。このドバイが近代化を図る一環として幅400m、延長2kmに亘る海岸の埋立地に新たな街のマスタープランを設計する指名コンペである。所員だった私は所内に結成された日本人チームの一員となり、このプロジェクトを担当することになった。第一次オイルショック直後の1974年のことである。

*1
Dubai, United Arab Emirates (UAE)の首長国

その頃、サウジアラビアにも仕事があったので、現地を調査する機会に恵まれた。ここに掲げた写真はすべてその時のものだが、恐らく今はもう消滅した都市景観である。河川のようなクリーク（入海）*2沿いにこの地域に独特な木造の帆船（ダウ船）*3が行き交い物資を荷揚げする波止場があり、その背後に活気に満ちた市場（スーク）があった。関税フリーゾー



写真 04-1 クリーク沿いの港と旧市街地

*2
ダウ船：この地域特有の木造帆船

ンだったドバイは、中東にあって東との結節点として大いに栄えた。アブダビ*3と違い、同じアラブ首長国連邦の一員でありながら、石油資源に乏しい国の基盤はあくまでもこの交易であり続けてきた。

*3
Abu Dhabi, United Arab Emirates (UAE)の首長国



写真 04-2 日除けのスーク

港町はどこでも闊達な空気に満ちている。当時のドバイには、「風塔」を戴く住まいが沢山残っていた。装飾を施された4面に

開口部を持つこの塔は、室内の温熱環境を緩和する自然換気の仕掛けである。そして、まだ低層の建物がほとんどであった平坦な旧市街地にあって、印象的な都市景観を生み出した。だから、海路港に近づく船乗りにとって、このプロフィールは遠くからも容易に認識できたに違いない。そして、ようやくドバイに着くことを知らせたはずである。幸いコンペは一位となった。しかし、その後我々の提案が実施に移されることはなかった。周知の通り、80年代からそれよりも遥かに巨大な経済の力が、急速にこの地域を席卷し始めたからである。



写真 04-3 旧市街地の風塔群